

武四郎をたどり、北海道遺産 完全制覇を達成。

高瀬 英雄・淑子夫妻

北 北海道遺産には、人生を変え

るほどの力がある。少なくとも、伊勢・松阪に住む高瀬英雄氏は、そう感じているだろう。

高瀬氏は、夫人と、北海道と、そして北海道の名付け親でもある幕末の探検家・松浦武四郎をこよなく愛する男だ。定年後、武四郎の膨大な資料を携え、夫人とともに1年間北海道に滞在。帰郷後、その旅先で出会った知人から、北海道遺産選定の話を聞き、いともたつともいられず全遺産制覇の旅を決行した。なぜか。尊敬する松浦武四郎が歩き夢を描いた地が、いまだのように生きているのか。そして先人たちが、北の大地で何を成し遂げようとしたのかを肌で感じたかったからだ。

挑戦の旅は、2002年から約3年半にも及んだ。夫妻は北の大地を次々とめぐる。武四郎の残した記録と重ねながら、歩き、登り、考え、探し、話を聞いて訪ねまわる

日々。そしてアイヌの里を訪ねたとき、運命の出会いが訪れた。安政5年、屈斜路湖探検の武四郎を案内した、アイヌ民族の子孫とめぐり合ったのだ。夫妻は、まるで武四郎さんながらその地に留まり、アイヌの人々と語り合い、その文化を学んだ。そして、それがきっかけとなり、高瀬氏は郷里の「松浦武四郎記念館」館長に任ぜられることとなった。

旅を終えた高瀬氏はこう振り返る。人生に必要なものは何なのか。夢や希望を実現する勇氣と実行力ではないのか。「人が人として成し遂げるべきものに勇氣を持って行動せよ」。北海道遺産は、私たちにそう語りかけているようだ。

最近、めっきり余暇の少なくなった高瀬氏を尻目に、夫人は単身で北海道へ渡る。やはり、北海道遺産をめぐる旅は、彼らの人生を大きく変えたに違いない。



Hideo Takase



楽しむ人がいる。学ぶ人もいる。
北の宝物を道しるべに、
遺産びとが動き出す。

四季を通し、路面電車のいまを明日に残す。

アマチュアカメラマン 野村 耕一